

本日「麻生三郎展」が始まりました(6月12日まで)。

厳しい時代に向き合い、人間の存在の尊さを描き続けた麻生(1913-2000)の約60年にわたる画業を、3つの章に分けてご紹介しています。



### 第1章「闇の中で光を見つめる」

10歳時の関東大震災と32歳時の東京大空襲で家を焼失し、召集令状を2度受けた麻生は、戦時下から戦後しばらくまで、妻や生まれたばかりの娘などの姿を闇に灯る明かりのように描きました。



## 第2章「赤い空の下で」

戦後の復興や高度成長の陰でなお重苦しく不穏な空気を、麻生は赤黒い空と感じながら、その重さに抗する人々や街を絵の中に立たせました。



## 第3章「内と外の軋み」

1960年代以降も安保闘争やベトナム戦争、核実験や環境破壊などの現実直面した麻生は、人間の生命を否定し脅かす大きな力への抵抗として、混沌とした空間と人体がせめぎあう絵画を追究しました。



去年の11月に東京での麻生展オープンをレポートしたときは、「表面的なキレイさ、かわいさがもてはやされがちな今日だからこそ、麻生の重い絵を紹介」という言葉がありましたが、その後1月からの京都展の頃には閉塞感や不安が日本を覆うようになりました。そして誰もが人の命を想い続けている今、麻生三郎の絵はあらためて心に迫るように感じています。愛知会場では説明パネル10枚と『鑑賞ガイド』を新たに作り、また第3章の後半に「人間像の再生に向けて」という節を立ててみました。じっくりとご鑑賞いただければと思います。



5月14日には、岩手県立美術館の原田光館長に「赤い空の下で」と題してご講演いただきます。長く神奈川県立近代美術館におられた原田さんは、1994?95年に神奈川・茨城・三重県で開催された麻生三郎展の主担当を務められ、作家とも親しく接しておられた方です。こちらもご期待ください。

(T.M.)